

小集団理論と調査

牧 正 英

序 文

最近、小集団論に関する研究が数多く提出されている。この中でも特に小集団論の形態についての分析がかなり集中的に進められている。所が全体的な面での小集団自体の体系的且つ内容的研究の分野に目を転ずれば形態分析中心といった様な感が非常に強いように思える。この事はある観点から見れば小集団そのものに対する研究の時間的過程が短き事と更には社会学的知識への停滞とにその因があると考えられる。

けれどもとにかくこう云った点を考えて見るに当然体系的整理が必要とされてよいものが未だそのままの状態にある事を許される事がないのである。本稿に於ては以上の点をかながみて最初に小集団理論と調査の分野についての内容的分析と体系的整理を試みると共に従来、小集団自身の形態と社会学自身が試みる形態とが全く別個のものであると云った様な系統を出来得るだけ両者が応用し得る分野への整理を提出してみたいと思っている。そして同時にその基本的な線をも明瞭にしておく必要がある様に思える。小集団そのものは決して形式理論の枠におさまるものではないものであるし又小集団論自身の性格から見て経験的因素の参加がなければ生きてこないものである。そう云った性格を持ちながら小集団研究そのものがなぜ形態分析の域を未だこえていないのか。又とどまっているのであろうか、この点について小集団の枠が従来より更に広い立場を要求される事が必要になってくるのであろう。この事は他の諸科学の参与によってある面は可能であろう。しかし自

己の枠に対する受け入れとそれを処理し得べき点はどうであろうか。いわゆる小集団の枠の内容的統合 (Consolidation) がここに考えられるのである。本稿の最初の分析点はこの問題から R. F. ベールズの小集団理論と調査¹⁾ の手がかりから進むことにする。

本 文

最近、過去 5 年間に渡る小集団調査に関する文献の整理から始める。吾々は D. Cartwright and A. F. Zander の Group Dynamics: Research and Theory 1953 年,¹⁾ G. Lindzey の Handbook of Social Psychology 1954 年²⁾ の中から H. H. Kelley and T. W. Thibault の Experimental Studies of Group Problem Solving and Process と H. W. Riecken and G. C. Homans, Psychological Aspects of Social Structure とをその概要的な面での代表的なものとして指摘され得る。又調査方法論を中心にして展開したすぐれた文献として Lindzey Volume の中に R. W. Heyns と Ronald Lippitt らによる Systematic observational Techniques, Lindzey と E. F. Borgatta らの Sociometric Measurement の二文献をあげることが出来る。次に小集団調査の 1900 年から 1953 年に至る目録をあらわした F. L. Strodbeck と A. P. Hare の Bibliography of Small Group Research³⁾ をあげることが出来る。此の文献においてはこの面についての歴史的視点の規定に手助けとなると共に更にこの文献を基盤として、1955 年、Hare, Borgatta, Bales らによる “Small Group” studies in social Inter-

ction⁴⁾ があらわされた。この論文集の中に於ては従来の小集団の古典的形態と称せられるクーリー及びジンメルの小集団の意義を認め、更にはこれを基礎として Gittler's Review of Sociology の中に集録せられている R. F. Bales, A. P. Hare と E. F. Borgatta の “Structure and Dynamics of Small Groups: A Review of Four Variables⁵⁾” の基盤が出来上った。この論文では小集団の性格に関する調査を4つの変数 (Group Size, The Communication network, The nature of the group task, Personalities of group members) のフィルターを通してその構造と動きをとらえようとしたものである。けれどもこの論文では小集団の諸構造とその動きをとらえるに関して社会学的観点からの枠が未だ十分に設定されていない。こう云った不足を補うものとして、未刊ではあるが経験的研究の基盤に完全に立って社会学的側面からの小集団の取り扱いを指摘せる Hare の “Social Interaction, An Analysis of Behavior in Small Group” が近く出されるとき。かかる文献整理の全観点を振りかえてみるに此処に次の様なことがいえるであろう。それは過去5年間に渡るこの研究過程は従来もたなかった小集団調査の蓄積と更に1つの線にまとめるべき統合 (Consolidation) の段階にきているといえるであろう。

現今の科学^{ニ・フ}欲求はあらゆる諸点からの研究によって複雑な事象の全般的な説明を行う。このことはいはば総合 (Synthesis) といった観点にその欲求が考えられる。此の欲求は更に期待のレベルに押し進められる。しかしこのレベルではいわゆる事象を一般的に考えられる如き、発見するとか部分的に理解するというのではない。科学者として理解の感に沿った期待を持つといういわば現実^{ニ・フ}に為され得べき所のものを予測 (Predict) するという線が必要なのである。この点について多くの一般の人々がいろんな事象について科学者に期待しそれに依存していることは勿論のことである。

一般的に普通の人々が予測という考え方の場合には高度に統制化せられた実験室の素因組成の結果からでなく、直接自然的な事柄について予測す

るものであるという考え方がある。このことからある時代、ある時期に於ては科学者が予測するという事についてなんらの知識なくして予測出来るものであるという考え方をする人がいるものである。換言するならば一種の千里眼の如き種類でもって自然的な未来を予示するといった具合である。しかし科学者の予測の態度は例えば近時に於ける天候の予測の場合の事例を考えてみるに数多くのこまかい素因から出発してそれを高度に密度の高い素因に作りあげて予測せしめると云った具合に真理に近づくものである。此の種の自然的な予測に最も近いものとして社会科学の場合投票選挙の予測がある。この場合には非常に異った量的にいろんな要素をもった人々の相互関係から作り出されるこの種の数多くの理論体系は将来更に行動理論に於て活用される様になってきているがこの点から考えて見ると予測を作るといことは単的に理論上の素因の変様からだけでなく、この場合インホームエーションである数多くの成員から得られるものであるという点が出てくるのである。この各人及び単位に於て作られる予測の種類は “Interpersonal Arts” とよばれる。この Interpersonal Arts を更にくわしく説明すれば対人コミュニケーションを通した動機と行動変動の方法、即ち集団決定の設定並びに評定の発展の方法、教育及び学習の方法、個々人の精神療法の方法、人間関係に於ける1つの学習グループ指導の方法・作業集団に於ける道徳及び育成の方法等が広くあげられるであろう。この状況の中に於ては指導者・療法者^{ニ・フ}とその他これらに関与せる人々は行動においてあらわれた所の要素をよむこと、あるいは正確に進んでいるところのもののすすんでいる予測を診断することにある。たしかにかかる複雑にして人間相互の状況に於ける関係からすべてのものを得ることが出来、或いは必要なものを得られるということは考えるにかなり困難なことである。もしそれを得ることが出来るならば絶対的正確な予測が出来ることが十分に^{ニ・フ}してその過程に進むことが出来る。そしてそれと共にそれについて出て来る要素の読む能力の増進とそれについての実験的な^{ニ・フ}すべき能力の増進が見られる

のである。この要素の過程に於て更にはかかる中位的にして基盤の貧弱な予測を補修する行為の立場に一社会的関与が必要である。更にその要素の改善と相互の関係の計算がある。こう云った点でこの種の総合 (Synthesis) の理論が従来迄の文献の中においてはもれている。たしかに研究の蓄積方法は主体の問題を解決しないものではあるが、必要な段階として小集団理論の場合の調査の一段階として考えられるものである。

かかる段階から総合の問題の更に具体的な概念の形相をくわだてる為にそう云った現象の諸性格をみていくことが必要である。

行動における諸要素の観察には1つの遠近画法がとられる。これは1集団、例えば5人集団の各メンバーにある課題を与える事によっての実験、その結果による科学的な理論付けを行うものである。⁶⁾ これらは時間の短い期間に渡るものによって進められるものによってあらゆる点に試みられる。科学的な理論付けを行うこういった方法において最初に事実のシンボリックによってなさねばならぬことが必要とされている。この事は科学的な理論付けをする人にとって予測する事を試みる前、この問題から離れることが出来ない事を附言する事が出来る。予測者——この場合、科学的理論付けをする人——は、いわば如何にしてある要素を得ることが出来たか或いはどんな影響もあったかという風なすべてのことについて準備をこの場合もたねばならない。これらの準備はこの方法における基礎的な自然的予測を得るに必要である。この意味から全体遠近的な方法が採用されることが望ましい。そこで問題は此処で更に自然的な成員相互間行動の予測の為に理論上の総合に対して、様々な影響についてのある具体的な概念の形相を試みるという焦点を再度述べておこう。

与えられた成員をある時間において観察し始める。観察するメンバーはそれぞれの焦点を構成し行いについての過程が問題枠として設定される。最初の行いについて考えられる過程において行いの性格(質)の分析がある。一社会的行いは大体多くの部分において、刺激特性を持っている。その行いは集団の課題環境の一部分を構成するある目

標をあらわしている。目標について主張されるところのものは観察の課題内容とよばれる。一刺激行いの関連の特性はその課題の沿革である。

Sherif⁷⁾ も指摘しているが如く、かかる実験的方法による集団の態度形成は集団規範にむかって発展する傾向を持っている。いわば大部分の集団成員は集団規範にむかって統合する傾向をもってゐる。これは自我構造と集団規範との両関係からの集団間関係の研究としてすぐれたものである。仮説的集団成員のリアクションの予測を企だてる上においては、何時、如何にして賛成(一致)、反対(離反)、どんな位置地位において生じて来たかをか知る事が必要である。

Asch⁸⁾ の実験では一致への傾向の力を劇的に表現している。いわば認知過程(経験)を社会的行動成立の基礎に置くことを立証せしめた。

この点からすれば集団規範に調和する課題内容の方法を知らねばならぬ原則が明瞭になってくるであろう。そして統合及び逸脱に対する集団態度形成——いわば賛成及不賛成の如き蓋然性にもとづく——が主要な点として事実が考慮されることになる。周知の如く Whyte⁹⁾ は一般組織の成員とコーナー・ボーイズとの関係を低い地位の成員及び高い地位の成員についての反応態度研究から社会関係として把握する体系を提出した。この様に多くの初期の実験者達はいわばその素因——この場合成員の持つ特性や傾動を示す——の性格についての仮説に従って異った認知並びに判断構造を提示しつつめた。更にここで Bauer¹⁰⁾ の研究シリーズをとりあげてみるに、彼は内容の認知及び反作用を他我との関係におけるコミュニケーションの可能性によって影響がある事を指摘している。こう云った点を見てみると観察目標の認知構造には社会関係としての枠にある事柄をその事実として予測のカテゴリーに組み入れることが必要である。

この観点からすればある関係枠における性格付けの問題がおこってくる。いわばある行動の種類が他のそれとどの様にして組まれるかといった課題である。この様な点での従来の観察そして予測の程度はいわば学習の一過程 (A Process of Le-

arning)とか Object-Adaptive Cognition の枠で試みられている。又ある段階では各々の社会的目標は単位としてとらえ、例えばその単位は一階級からの目標の性格付けと個々人の過去の経験との組み合わせと云う風に試みられている。しかしこう云った目標の社会的格付けはかなり根拠の表示が困難であってその基準となるべき点が粗雑になりやすい。従来のかかる諸点を考慮に入れて社会的目標の段階としては、その性格付けはそれに貢献している程度あるいは制度化された規範の理想像に準拠している（あるいはしていない）程度の評価法がとられている。

この過程に於ける側面及び種々なる型相を主観の客観化 (Projection) 転位 (Displacement) 転移 (Transference) 同一化 (Identification) 等の用語によって認知化されている。

しかしかかる認知化においても感情構造の問題は又かなり困難な問題である。Redl¹¹⁾はこの点について効果的な方法を記述したが、その方法には社会学の側面からの妥協する点がかかなり狭いように思える。一般的には精神分析の側面からの方法の方が今述べた点についてはかなりの積極性を持っているということが大体において云えることである。問題解決過程に於ける認知の性格付けは過去数年間に渡って再度注意を受けて来たものである。それは J. S. Burner とその共同研究者¹²⁾によって示されて来た。そして大きな範囲に渡る計画がもられ、いわば人間の認知構成の枠組みは2つの流れにまとめることが指摘される様になった。その1つは実験における認知構造を予測する行動派ともう1つは統計的方法をとる計画とである。これらは実験結果の予測を数量測定による総合的研究であって、人間行動とその相互関係の予測モデルの設定に含まれる重要な枠組みである。認知分析の結果は認知能力に依存する。結局それらは課題必要条件の関係を除いては明らかにすることはかなり困難である。もし十分に予測する事にするためには、課題必要条件の関連に於て課題能力を測定することである。しかし課題必要条件は容易に記述することが出来るものでない。あらゆる課題はそれぞれある程度において複

雑である。個人と集団に対する問題解決の過去の調査においても、課題の具体的なそして多くの異なった種類を取り扱った事例でも未だよき課題の分類が示されていない。多くの考えられるある課題目的の最も重要な性格の1つは必的関係に関連することによって明示される点についての段階であろう。このことについては Festinger¹³⁾も指摘している如くかかる特性は“Social Reality”に対するとおの“Physical Reality”であるとよばれている。

この特性は次の様な段階において更にその具体的形相の具現化或いは普通化につとめられるであろう。この場合の基準として主要価値への程度即ち課題にたいする成員の態度パターン、集団統合にたいするもののパターンという風にそれぞれの働きかけの段階を定めることが出来る。かかる方法が“Social Reality”“Physical Reality”とを関連体系としてとらえることの準備段階として必要であろう。

比処に予測の問題に関連するものとして、内容的要素のリストを掲げることが一応の整理として考慮されることである。即ち課題に満足して一致統合を示している特性をもった段階・集団規範から離反を示している特性の段階・集団規範に対する主体の態度の段階その他、認知能力の段階等様々な側面における課題の性質の段階等の要素が指摘されるであろう。勿論ここにあげたリストが完全ではないが実験的且つ観察研究の側面からの重要なものとして立証することが出来る多くのよき要素にふれていると思われる。

このことからこの様々な要素の関連性について何があるか、又どんな時に、如何なる相互作用においてと云った様な点が課題として生じて来る。更に如何にして予測者はこの確実な状態で予測の要因を得るか又要因獲得の為に使用する計画・テスト・観察にはどんな装置で方法をとるかとな風ないわば内容的なリストに対する調査者の準備段階の総合の問題にかかって来る。そこで一般にはこの様な場合、予測者は集団に於ける各々の成員に対する同種類の分析を行うものである。そしてその分析を相互の体系における目的“Goal”或いは目標“Objective”に従った働きからの意思決定

の影響をみる様に試みる。いわばこの段階を仮に(1)目的と目標体系調査 (Goal and Objective System) としておこう。このモデルはいわば各成員と成員間の作業が如何なる目的で又目標で又従って達成に行動しているかという点に調査の基準モデルを提出するものである。これは同時に集団の意思決定に重要な役割と影響を及ぼすものであるといえよう。Newell と Simon's¹⁴⁾ の小集団の以上の意味に従ってみた定義に 1 つの複合 information-processing System であると述べている。このことはかかる「人間的」なそして「主体的」且「主観的」な要因を如何して科学的研究の対象としての可能性を生み出す為の構造設定モデルの企図を指示している様に思える。そして調査方法のねらいにおいても様々な要因から出ている現象がある意味で一定の傾向があるならばそこになんらかの科学的説明が予測し得るはずである。そこでこの場合それらの小集団の枠が 1 つの思考、行動様式をとるならば、又 1 つの社会的なものとして規範付けるものならばかかる構造を基準として小集団調査の具体的形相と変動とを科学的に予測し得るはずである。かかる意味から小集団調査と理論との 1 つのカテゴリーが第一の目標、目的予測体系として示すことが可能とされるわけである。

次に第一の体系を更に時間的に把握し得るために第二の体系をもつけ加えなければならぬ。それは(2)価値体系 (Value System) の調査カテゴリーである。この場合の価値は集団行動の規制をとる非常に指示的なものとして考える。いわばバールズの数多くの実験では表明的・統合的・社会的・感情的領域の積極的反應で連帯感・緊張緩和・賛成のフィルター・用具的・適応的・作業領域の解答反應で示唆指示・意見提出・指導提示のフィルター・用具的・適応的・作業領域の質問提示の反應でオリエンテーション要求・意見を求める。示唆を求めるフィルター・表明的・統合的・社会的・感情的領域・消極的反應では不賛成、緊張を示す対立を示すフィルター等のかかる行動域のカテゴリー換言すればオリエンテーションの問題・評価の問題・統御の問題・決定の問題・緊張処理の問題・統合の問題となるが価値がこの域のいずれかに

よって、いろんな集団成員の差異が生じ変って来るということが明らかになるであろう。これは更に具体的に述べれば仮に一企業体活動の例をとれば価値が「積極」「消極」「調和」「離反」のいずれかによって社会におけるかかる活動の種々の差異が生じて来るということがあげられるであろう。

(1)及び(2)のカテゴリーから当然次の課題として(3)集団の性格付け (Group Characteristic) の調査カテゴリーをあげ得るであろう。それぞれの集団には役割・地位の上・下などにそれに附帯せる力関係・権威関係の基盤からそれぞれの集団の形体と活動の具体的なあり方に影響があるということ。バールズのこの点についての説明はグループ・ダイナミックスの中に示された交互作用過程分析に関する基礎理論で重要性あるいは威信に関して階層化された尺度上の地位の分化の項目で説明されている。この事は換言すれば社会の中に見受けられる地位・役割の上下関係と富力・権力・威力による優劣・強弱・尊卑の判定に共通的な社会的な格付けの要因が如何にしてどんなあり方をもって影響されているかという点に多くの重要点がみられるであろう。このように集団の性格付けのカテゴリーは更にはその過程として格付けの問題に進むものである。次に一応最後の第四のカテゴリーとして、(4)行動の形式 (Pattern of Action) があげられる。これは行動の関係原理から又相互関係の原理から何等かの方法で有機体の外部のものとの関係づけられている活動として、その基礎的単位、いわば社会に固定化し——或る意味で文化特性となっているところのもの——すでにある形式として様々の要因過程に影響をあたえるものを設定する。この場合のカテゴリーでは時間的・社会的な形式がどの様にして集団ならば集団の過程・構造・形相に影響をあこえるかを主眼としてみることにある。かかる形式の場合、バールズの実験では順序づけの位置による影響・組織の影響システム・インフルエンスで説明がほどこされている。いわば「未知数」としての行動とは区別せる「既知数」の行動の問題である。

以上の四つのカテゴリーはあくまで調査と理論

の上での理想型としてとらえてみた。そしてかかる理想型が一応の基準となって綜合の域に近づくことが必要となってくる。私はこの本稿の最初で内容的指摘の必要性をといた。いわばそう云った内容を此処に四つの体系として指摘してみた。これは未だ勿論完全なものではない。多くの問題点があるであろう。しかし将来の問題はかかるカテゴリーや型相を仮説として実証していく所にかかっている。そしてこの実証が確立後、綜合の問題がはっきりと生れてくるものとなるであろう。

(未完)

序文 参考文献

- 1) Sociology today problem and Prospects 1959.—III. The Group and the Person
13. Small-Group Theory and Research by Robert F. Bales p.293.

本文 参考文献

- 1) D. Cartwright and A.F. Zander (eds.), Group Dynamics: Research and Theory, Row, Peterson, 1953.
(グループダイナミックス, カートライト・ザンダー 三隅二不二訳編 誠信書房 一九五九年)
- 2) G. Lindzey (ed.), Handbook of Social Psychology, Addison-Wesley, 1954.
- 3) F.L. Strodbeck and A.P. Hare, "Bibliography of Small Group Research (from 1900 through 1953)", Sociometry, 17 (1954), 107-78.

- 4) A.P. Hare, E.F. Borgatta, and R.F. Bales, Small Group, studies in Social Interaction, Knopf, 1955.
- 5) R.F. Bales, A.P. Hare, and E.F. Borgatta, "Structure and Dynamics of Small Groups: A Review of Four Variables", in J. Gittler (ed), Review of Sociology, Analysis of a Decade, John Wiley, 1957.
なお拙稿, 小集団の組成その(一)関西学院社会学第五輯参照。
- 6) Bales, R. F. Interaction process analysis: A Method for the study of Small Groups. Cambridge, Mass: Addison-Wesley, 1950.
- 7) M. Sherif, The Psychology of Social Norms, Harper, 1936
- 8) S. E. Asch, Social Psychology, Prentice-Hall, 1952.
- 9) W. F. Whyte, Street Corner Society, University of Chicago Press, 1943.
- 10) R. A. Bauer, Personal Communication to the author.
- 11) F. Redl, "Group Emotion and Leadership," Psychiatry, 5 (1942).
- 12) T. S. Burner, J.J. Goodnow, and G.A. Austin, A Study of thinking, John wiley, 1956.
- 13) Festinger, "Theory of social Comparison Processes," Hum. Relat., 1954.
- 14) Allen Newell and Herbert A. Simon, The "Logic Theory Machine, A Complex Information Processing System," IRE Transactions on Information Theory, Vol. IV—2, No. 3, 1956.